The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複数言語環境に育った青年たちのライフストーリー
Author(s)	中尾, 未来（周正）
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2018, 52, p. 75-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

複数言語環境に育った青年たちの ライフストーリー

中 尾　未 来（周正）

キーワード：移動する子ども／アイデンティティ／ライフストーリー／母語

1. はじめに

1980年代以降、経済情勢の変化や交通手段の発達などにより、日本に定住する外国人が急増した。突如として存在感を増したかれら[1]はニューカマーと名付けられ、その子どもたちは「日本語指導が必要な児童生徒」[2]として、主に教育社会学、日本語教育学、文化人類学等の分野で研究が行われた。これらの研究で子どもたちは親世代の国籍、言語、血統、歴史、エスニシティ等の既存の集団に基づいて様々に「名付け」られてきた。

本稿は、複数言語環境に育った2名の青年を対象とし、かれらを個別的な存在として捉え、その固有の経験を理解するためにライフストーリーを記述する。そして、かれらの言語との関わりについて、「移動する子ども」という分析概念を用いて考察を行う。

2. 先行研究

1980年代以降にニューカマーの子どもたちが急増し、教育現場において顕在化したことによって、日本における移民の子どもたちの多様性が再考されるようになった。榎井（2011）は「旧植民地出身者、海外からの移住者、引き揚げ者、帰国者、日系、ダブル、無国籍者、在留資格がなく無国籍状態に置かれた子どもなど」を例に挙げ、国籍だけでは捉えきれない様々な背景

を持つ子どもたちの現状を指摘した。ここでは、移民の子ども世代に対して、既存の集団に基づく名付けを行うことを避け、かれらの言語的側面に注目して「複数言語環境に育つ」というフレーズを用いる。

日本語教育学における複数言語環境に育つ人々についての研究は、主に子どもたちを対象とし、その言語能力に注目したものが多かった。教育現場からの要請もあり、子どもたちの日本語能力をどのように伸ばすべきかという問題意識の下、日本語能力の測定や教室における効果的な実践等の研究が行われてきた。そして、子どもたちの日本語能力だけではなく、母語・継承語能力もまた重要であるとして、母語・継承語をどのように保持・伸長していくかという議論も活発になされてきた（中島2001, 斎藤2005等）。このとき、母語教育の文脈では、「アイデンティティ」と「母語」の間には強い結びつきがあるとされる。「言語マイノリティ当事者」による母語教育実践について調査を行った松本（2005）は、「母語はアイデンティティーの根幹を成すもの」であり、「日本人が日本人として、ブラジル人がブラジル人として誇りを持つためには、自らの母語に誇りを持たなければならない」（松本2005：104）と述べる。また、「新渡日（ニューカマー）外国人児童生徒」に対して母語教育支援に関わる真嶋（2009）は、「母国」が「母文化」についての理解が、「自分は何者なのか？」というアイデンティティを確立する際に重要となるとする。アイデンティティは、確固たる「根幹」を持つものであり、固定的で本質的なものであるとされる。

しかし、箕浦（2003）によると、1980年代後半以降から急激に進んだグローバル化とそれに伴う資本や人々の移動の急増により、それまで同質な統一体だとみなされていたものが、「多様な価値を内包した雑種的なもの」（箕浦2003：294）であると考えられるようになってきた。そして、1990年代以降の構築主義の台頭により、カテゴリーと結びついた本質主義的なアイデンティティが存在するという考えは否定されるようになった。ホール（2001）は、アイデンティティは単数ではなく複数であり、静的で時を超えて安定したものではなく、「対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成され」（ホー

ル2001：12)、流動的で絶えず変化し続ける終わりなきプロセスの内部にあるとする。つまり、「アイデンティティ」とは、既存のカテゴリーとの同一性ではなく、言説を含む様々な他者との差異に基づく、動態的な概念だと考えられるようになっている。

複数言語環境に育つ人々は、しばしば国家間、言語間、文化間等の往来を経験する。かれらは親世代の「属性」によって分類され、その「属性」を引き受けることが自明の前提とされた。しかし、かれらは、血統、言語、文化など、「誰が、どこで何を基準に境界を引くかによって、社会の中での『位置づけ：labeling』や本人自身の『位置取り：positioning』が流動する」（関口2003：206）存在であるといえる。境界の引き方によって、かれらに対する名付けも変化するのである。

このような人々について、特定の集団を前提とした視点からではその「主体的な『ことばの学び』」ありようを捉えるには限界があると指摘したのは川上（2011）である。そして、かれらの「主体的な『ことばの学び』」を動態的な視点から捉えるという目的のもと、「移動する子ども」という概念を提示した。これは、Pollock & Van Reken（2009）が提唱した「Third Culture Kids[3]（第三文化の子どもたち）」を発展させた分析概念であり、「空間的に移動する」、「言語間を移動する」、「言語教育カテゴリー[4]間を移動する」（川上2011：6）という3つの経験に注目する。

本稿は、「ニューカマー」や「在日○○人」といった集団に分類されがちな複数言語環境に育った青年について、かれらを集団の「一般例」または「特殊例」としてではなく、個別的な存在と捉え、それぞれの固有の経験を理解することを目的とする。また、かれらと言語との関わりを包括的に捉えるために、「移動する子ども」という分析概念を用いて考察を行う。

3. 研究方法

本稿では、ライフストーリーという方法を用いる。このとき、ライフストー

リーとは､｢個人が生活史上で体験した出来事やその経験についての語り｣(桜井2005：12）を、時系列と因果関係というふたつの要素を考慮しながらむすび合わせたものを指す（Polkinghone1995，中山2008)。

ブルーナー（1998）によれば、人間が現実を理解する思考方式には「論理－科学的様式」と「物語の様式」という2つが存在する。どちらも因果関係を含意する陳述として表現されるが、陳述の様式は異なっている。論理－科学的様式における陳述は「もしもxならば、yとなる（then)」であり、普遍的な真理の探求を目的とする。一方、物語の様式における陳述は、「王が死んで、そしてそれから（then）王妃が死んだ」であり、ふたつの出来事の間に「いかにも起こりそうな特定の連関」を探求することが目的となる。物語の様式においては、答えをひとつに決める必要がないため、複数の意味づけが同時に存在しうる。やまだ（2000）は、「ストーリー」を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」（やまだ2000：3）と定義し、出来事の意味は、2つ以上の出来事をむすびあわせる物語行為のなかで発生するとした。したがって、個々の体験が同じでも、語り手がストーリーを語る際にそれらの体験を「どのように関連づけ、組織立て、筋立てるかによって、人生自体の意味は大きく変化」（やまだ2000：5）する。

Polknghone（1995）によれば、ブルーナーによる2つの思考様式のそれぞれに則った語りの分析が存在する。物語の様式に則った語りの分析においては、インタビューの場における語りの生成は、協力者と調査者の相互行為によって行われるとみなす。そして、出来事どうしをむすびつけることによって意味を生成する行為は、インタビューが行われる場だけではなく分析過程においても行われていると考える。したがって、本稿における調査者は、協力者の語りの単なる聞き手ではなく、ストーリーの共同制作者であり、共に意味の生成に参加する存在である。

4. 調査

4.1. 調査概要

複数言語環境に育った2名の協力者に対し、2015年6月から9月にかけてそれぞれに対して2回ずつ、1名あたり計2～3時間の半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューとは、「調査者があらかじめ質問項目を準備しているものの、対象者の意識の流れや内省を重視して、柔軟に対応していく方法」（村岡2002：127）である。インタビューの際には、ICレコーダーによる録音を行った。初回のインタビュー時に事前説明を行い、[5] 協力者の同意を得た上でインタビューに入った。インタビューでは、事前に用意した質問リストを参照しながら、協力者の返答に応じてインタビューを展開させた。その後、インタビューの録音データを文字化し、それを繰り返し読み込んだ上で、出来事のまとまりの抽出を行った。出来事のまとまり間の因果関係を考慮しながら時系列に並び替えて、ストーリーとして文章化した。書きあげたストーリーについては、協力者の意図や解釈と異なる部分がないかどうかを協力者に確認し、随時修正を行った。

4.2. 調査協力者

協力者2名のプロフィールおよび筆者との関係（調査当時）は以下の通りである。

【サチコ】21歳。父は日本出身、母は中国出身。兄弟姉妹はいない。日本で生まれ、地元の公立小学校、私立の中高一貫校に通った。現在は実家を離れ、大学で経済学を専攻している。筆者とは幼馴染で、小学校は別だったが、家族単位で交流があった。筆者と同じ中高一貫校に通い、卒業後もLINEなどで連絡を取り合ってご飯を食べたり遊びに行ったりする。

【ヤスユキ】22歳。父は日本出身、母はフィリピン出身。姉がひとりいる。フィリピンで生まれたが、1歳頃に日本へ帰国した。小中高ともに地元の公立学

校に通い、大学では言語学を専攻している。筆者とは、筆者が大学1年生の時に知り合った。筆者と顔を合わせることは少ないが、共通の友人が多く、会えば世間話をしたり気軽に冗談を言い合ったりする。

4.3. 協力者のストーリー[6)]

4.3.1. サチコのストーリー

幼稚園に通っていた頃、サチコは母から中国語で話しかけられていたが、サチコはそれに全く反応しなかったそうだ。当時のサチコの母は中国語がサチコにとって「メリットになる」とも思っていなかったため、反応してくれないサチコに中国語で話しかけるのをやめたという。それ以降、サチコとサチコの母とのやりとりは「日本語ばかり」になった。

この頃、サチコにはトモミという友達がいた。トモミは「中国とのハーフ」で、サチコはときどきトモミの家に遊びに行っていたという。また、小学2年生の頃にはショウ（筆者）という女の子と知り合った。ショウは中国から来た同い年の女の子だったが、初めて会ったときにはもう日本語を話していた。ショウはサチコと別の小学校に通っていたが、ショウの家にはよく遊びに行ったそうだ。

小学校の頃のサチコは、高学年になるまでは、年に1回は祖母の家があるTZ[7)]に「帰って」いたという。TZで「TZ語」[8)]はたくさん聞いていたので、いくらか理解できたそうだ。特に、小学生になってからはTZ語を話さなければ「この人とはやり取りできないんだっていうのが分かるから」、祖母と話す際には「TZ語」を話そうとしていたという。

あるとき、サチコがTZから日本に帰ってきた後に学校の友達と鬼ごっこをしていると、「TZ語」を言いそうになったことがあった。

サチコ:「鬼ごっこみたいなんしてて、それで、なんかちょっと待ってっていうのを、なんか、TZ語でテンシャって言うねんけど、なんか、それで、テン－テンシャみたいなの言(ゆ)いそうになって、あっ！てなったのを〈笑いながら〉めっちゃ覚えてて。〈笑い〉［へぇ］」

サチコはそのとき初めて「中国語」[9] を意識したという。そして、母親から「TZ語と標準語は全然違うんだよ」と教えてもらうまで「TZ語」は「ふつうに中国語」で、「中国人は皆TZ語を喋ってる」と思っていたという。

小学校高学年の頃、サチコは「お母さんの日本語が変」だということに気が付いた。お父さんは「ふつうの日本語」を喋っているはずなのに、サチコはそれまで父が話す日本語と母の話す日本語の違いに全然気付かなかったという。家でいるときは母の日本語は気にならなかったが、公の場では「恥ずかしいな」と思うこともあったそうだ。

同じ頃、サチコは自分が「ハーフ」だということも意識し始めたという。しかし、「見た目が全然日本人」で、周囲から何かを言われることもなかったので「何も思ってなかった」そうだ。サチコと同じ学年には「フィリピン人」のカトリーナという同級生がいた。カトリーナは見た目が「フィリピン人」だったために、みんなにからかわれており、サチコはカトリーナがからかわれていたのを「かわいそうやなあ」と思いながら見ていたという。サチコ自身は外見や母のことでからかわれたことはなかったそうだ。

中学校入学後、授業で英語を学び始めたことや、テレビで英語と日本語の両方を話す人を見たことがきっかけで、サチコは「二カ国語」を話せるのは「格好良い」と思うようになった。また、日本語と中国語の両方を話す自分の母や、自分と似た環境に置かれながら「中国語ぺらぺら」なショウを見て、中国語が分からないのは「もったいない」と感じるようになった。そして、中国語が話せるようになりたいと思うようになったという。

しかし、自分から勉強したいとは思ったことはなく、母に「教えて」と言ったこともなかったそうだ。ただ、高校生の頃に、「今日からうちらの会話は絶対全部中国語ね」と母に言って、中国語を「吸収しようとした」ことは何度かあったという。その提案にはサチコの母も乗り気だったが、すぐ会話に行き詰まってしまうので、お互い面倒になってやめてしまった。

中高の間は休みも少なかったので、サチコが中国を訪れたのは2回ほどだった。サチコが中学のときにTZに行った際、TZがすごく発展していて感

動したそうだ。その姿を見てから、サチコは、テレビで中国の悪口を言うような人たちに対して「実際行ったこともないのに」と思うようになった。

大学に入ってからも、サチコは自分からハーフだと説明することはなかった。ハーフなのかと聞かれることもあったが、その人と話したくなかったり説明が面倒くさかったりすると、サチコは否定することもあったそうだ。サチコは、自分がもっと「外人っぽい顔」だったら、見た目でハーフだとわかってしまうから説明するが、自分は「見た目日本人」で、ハーフだと言うと余計に「ややこしい」からハーフだと言わないと語った。このようなことはそれまでも度々あったが、サチコが大学に入ってから、「変わったな」と思ったことがあった。

サチコは大学1年生から、京都の花街でアルバイトをするようになった。店のママは芸妓で、中国に対してあまり良いイメージを持っていなかったという。サチコが来る前に店にいた女の子は「フランスとのハーフ」で、ママはそのことをお客さんによく話していたが、サチコが自分は「中国とのハーフ」だと言うと、ママから「微妙な反応」が返ってきたという。

サチコ:「私が、なんか、あ、実は中国とのハーフなんですみたいなん言ったら［うん］、なんか、……めっちゃなんか、あ、中国なんや？みたいな感じ？（中略）お客さんとかに、なんか、めっちゃハーフっぽいねぇ、みたいなん言われても、ママが、や、そんなことないと思いますけど、みたいな感じで言ったりするのを見て［うん］、なんか、あ、察した、みたいな感じ〈笑い〉［〈笑い〉］あー言わんほうがいいやなと思って。」

以降は、アルバイト先ではハーフなのかと聞かれても、「違いますよー、ぜんぜん日本人ですよー」と言うようにしているという。それは、サチコにとって「初めてぐさっときた」出来事であり、そのとき初めて中国とのハーフであることを「負の意味」で感じたそうだ。

また、サチコが付き合っている彼氏は、サチコが中国とのハーフであることは知っていてそのことに抵抗はないが、中国に対して偏見を持つ親のもと

で育っており、中国のことはあまりよく思っていないという。彼氏が自分の母親に彼女が中国人とのハーフだと言った時に、彼氏の母親は「おもしろがるような」反応を示したという。彼氏からその話を聞いて、サチコは衝撃を受けたという。アルバイト先での出来事と、彼氏の母親のことは、サチコにとって「中国とのハーフであることによって私が判断されることがあるんや」と思った出来事だったそうだ。

サチコは、大学で学ぶ第二外国語に中国語を選択した。サチコにとって、中国語は「外国語」だが、英語に比べて「ハードルは低い」。それは、「ちっちゃいときから聞いて」いて、「他の人よりも中国語の才能はある」と思うからだ。

サチコ：「中国に［うん］年に1回ぐらいは行ってたから［うん］、それで聞いたりとか、あと母も日本で、母の友達も中国人ばっかりで、なんかそういう人たちのなかにいくと、中国語で会話したりするから、それを聞いてたりとか［うん］、あとやっぱり聞いてる量が［うん］ほかの人より多い、ふつうの人よりは多いかなって。」

しかし、サチコの母の「母語」は「TZ語」であるのに対し、サチコが学校で習うのは「北京語」なので、「多少困難ではある」という。だが、TZ語を知っていたとしても一般の中国人には通じないので、勉強するなら「北京語」だと考えていた。しかし、講義を休んだりテストが思ったよりも難しかったりしたせいで、サチコは講義の単位を2回落とし、再履修をしてなんとか単位を取った。実際に中国語を勉強してみて、「今まで聞いてたものを文法的に解釈するとこうなんや」と感じたという。この頃のサチコは、祖母の家もある中国に留学することを「ありやな」と思っていたという。しかし、サチコは友人らと離れ離れになるのは寂しいと思い、結局留学はしなかったそうだ。

大学2年生の時に、サチコは母と二週間近く中国に滞在した。いつも訪れるのはTZだけだったが、そのとき初めて上海で観光をしたそうだ。TZの「歴史景観区」にも行き、それまで中国に持っていたイメージが覆されたという。

サチコは、日本で報道される中国についてのニュースは悪いことばかりで、

それだけを見ると中国はすごく「悪い国っぽ」く見える。日本で「何も知らずに」育ち、中国に行ったことのない人は、テレビで報道される政治の面しか知らない。日本には、中国に対していい印象を与えるものはないので、そのような人たちが中国に「いい思いは抱かない」のも、偏見を持つのも「しゃあないなって思う」そうだ。しかし、実際に中国へ行ってみると悪いことばかりではないし、文化は「素晴らしい」ものがあることを、サチコ自身は知っている。歴史もあるとても「いい街」で、サチコはそのことを「誇らしい」と思うという。サチコにとってTZはおばあちゃんやいとこもいる「第二の故郷」で、とても思い入れがある場所だ。

大学3年生の頃になると、サチコは自分がハーフであることを「ネタ」として使ったりするようになった。見た目が「外人っぽい」ため、ハーフだと言うと、周囲の人々は「先入観」で違う国を思い浮かべてしまうのだという。「アジア」だと言ったとしても、「タイとか顔の濃い系の国」だと思われるそうだ。だから、サチコが中国とのハーフだということが言い当てられることはないという。中国とのハーフであるということは、自己紹介の時に「インパクトがある」とサチコは考えた。

サチコは、自分がハーフだからといって「中国語喋れるわけじゃないし、別にふつうの日本人と変わりない」と考えている。しかし、サチコにとって、自分の中に「半分中国の血が流れてる」という事実は何があっても変えられないし、中国に対して「愛着がわく」のも、自分が「半分中国人」だから仕方ないことだという。自分の半分がそれで出来ていると思ったら、やはり親しみがわく。それは「自然の摂理」みたいなもので、たぶん「本能的なもの」だそうだ。だから、サチコにとって、中国語も思い入れのある言葉だ。もし「意識が高い」人であれば、「私が中国と（日本と）の架け橋になる」と思うかもしれないが、サチコは「そこまでは思わ」ないという。

第二外国語として中国語の単位を取り終えた後、中国語の勉強はもうしていないそうだ。サチコによると、中国語よりもまずは英語の勉強がしたいという。サチコにとって、英語が話せない状態は「とんでもない事態」で、「英

語ぐらい喋っとかなあかんわ」と、焦りを感じているからだ。

サチコ：「なんか最近さあ、めっちゃ英語の論文とか読むねんか［うん］、研究で、で、なんかそ－それでさ、それ読むのにめっちゃ必死やねん［うん］。何日もかかんねん［うん〈笑い〉］。でも日本語の論文やったら例えば何時間で読めるやんか。そうあるべきやのに［うん］、めっちゃ何日もかかるねん［〈笑い〉］。しょうもなって思って。」

もし将来外資系の企業に就職することになれば、そこで「登りつめる」ためにも、英語が必要になると思っている。

一方で、今でも中国語を勉強したい気持ちはあるという。「中国人」やトモミから「ふつうの日本人よりは発音いいね」と言われたこともあるので、中国語は勉強すれば「いける気がする」そうだ。暇だったら勉強して、資格のひとつとして「中国語検定みたいなん持てたらいいな」と思っている。同時に、中国語を「やっとかなあかんな」という危惧もあるという。将来、サチコの母が認知症になって日本語を忘れてしまったら、母とのコミュニケーションが取れなくなってしまうのではないか、という「一抹の不安みたいな」ものを感じているからだ。

4.4. ヤスユキのストーリー

ヤスユキはフィリピンで生まれたが、1歳の頃に日本へ戻った。ヤスユキの母は、家では「英語と日本語とタガログ語のちゃんぽん」を話していたという。文法は基本的に日本語だが、語彙は日本語に限らない「ルー大柴語みたいな感じ」だそうだ。ヤスユキが小さい頃は、「言葉の区別」がついていなかったため、英語と日本語とタガログ語を全て「同じ言葉」だと「勘違い」しており、それを「ふつう」だと思っていたという。ヤスユキが自分の母親が「英語と日本語とタガログ語のちゃんぽん」を話していることに気が付いたのは、幼稚園の友達に話しかけたときに「とぎれとぎれで通じひん言葉があるぞ」と気付いたことがきっかけだった。

ヤスユキ：「たとえば、そうだな、新聞とか。新聞ってタガログ語でた

しかジャリオって言うねんけど」

筆者：「うん、ジャリオ。」

ヤスユキ：「それが通じなかったり、なんかその友達に、ジャリオって何なん、みたいな、すごい怪訝そうな顔で見られたりとかした。」

「言葉の食い違い」を感じていたのは最初の1年ほどだったが、「通じない言葉があることはおもしろかった」という。幼稚園の年長組になり、小学校に入る頃になると、ヤスユキは「お母さんがこういう風に言ってるのは、友達で言うところのこれだ」ということを把握できるようになっていた。そして、「通じない言葉」が分かるようになっていたので、「通じない言葉」を選択的に言わないようにしていたそうだ。

ヤスユキは、小さな頃から辞書を読むような子どもだったという。小学生3年生のときに祖母からもらった四字熟語事典を熱心に読み漁っていた。「圧倒的に」日本語の方が好きだということもあり、英語で話すことはほとんどなかったらしい。ただ、小学生の頃から英語で礼拝を行っている教会によく行かされていたため、「意味もわからず」英語を読まされることはあったという。

ヤスユキ：「教会で、その、第二朗読[10]あんたやって、って言われたから、やって、みたいな。えっ、わ、わかった、みたいな。嫌や行きたくない、とか言いながら、なんか、あの－電車の中で、なんかその－英語をぶつぶつ読んで、お母さんがそれ聞いてるみたいな。（中略）それ（第二朗読）を英語で〈笑い〉やるんやけど、小学校でさあ、わかるわけないねん［うん］、特になんか文章やし［うん］。そんなに、喋るぐらいしか、逆にやってこんかったわけやから、もうよくわかれへん単語とかいっぱい出てくるんやんか［うん］。baptistってさ、使徒、使徒やったっけ？ 弟子とか、さあ、わかるわけない〈笑い〉［〈笑い〉］。なんやこれえ。で、ちょいちょいloveとか出てくるからloveって言ってみたりとか〈笑い〉」

ヤスユキの母は学校行事にも出席したので、同級生はヤスユキが「ハーフ」だということを知っていた。「お母さん外人や」と言ってヤスユキをからか

う同級生もおり、そのことは「とても嫌」だったという。しかし、だからといって「お母さんがフィリピン人」だということが「めっちゃ嫌」というわけではなかったという。

しかし、友達の家で出される料理が自分の家とは全く異なっていることや、友達の母親が「ふつうに日本語喋ってる」ということに「なんだか違うぞ」というような違和感を持つことはあったという。ヤスユキにとっては自分の母親が「スタンダード」だったが、自分にとっての「ふつう」が「果たしてふつうなのか」と考えることがあった。ヤスユキは自分にとっての「日本人の母親」を想像することはできなかったが、自分が日本にいることは「ふつう」であり、自分自身の「感覚としては日本の人と変わらなかった」という。

母親と自分の「価値観」の違いを感じることもあったという。ヤスユキによれば、ヤスユキの母は「家事は女がするもんだ」という「結構前時代的」な価値観を持っている。そして、明るい性格だが「根は真面目」なので、実用性のないものを嫌う。価値観の違いで「お母さんとぶつかる」ことはあるが、だからといって、母親を「自分とは100％違う分かり合えない人間」と考えるのはいけないという分別は持っていたそうだ。

小学校3年生と6年生の時に、ヤスユキは家族と共にフィリピンを訪れ、1か月ほど滞在した。その際に、ヤスユキは、現地の人たちが話す「全然違う言葉」をお母さんが話しているのを聞き、「ここがお母さんの故郷なんや」と感じたという。日本に戻り、みんな日本語を話しているのを聞いて、ヤスユキは日本とフィリピンは「全然違うところなんや」と思うようになったそうだ。

小学生の時は、フィリピンにある親戚の家を点々としながら挨拶したり色々遊んだりしたという。その頃は「言葉が全然通じない」上に「ご飯も合わな」かったらしく、小学生だったヤスユキにとって、フィリピンで過ごすことは「めちゃくちゃ大変」だったそうだ。フィリピンは暑く、ゴキブリもたくさんいて、どちらも苦手なヤスユキが「物理的に」フィリピンを「好きになれる要素が少なかった」そうだ。そのため、帰省すると言う度にヤスユキは嫌だと駄々をこねていたという。

小学6年生の時にフィリピンに「帰った」際、ヤスユキは母方の実家の牧場にいた子どもたちから「日本人」とからかわれたことがあった。その時に、ヤスユキは自分が「半分半分」だから日本でもフィリピンでもからかわれるのだと思ったそうだ。そのため、小学6年生の時はハーフということが「いちばん嫌」な時期だったという。

中学に入学したヤスユキは陸上部に入った。陸上部の友達は、気は強いが友達は大事にする「リア充っぽい」人たちだった。それまでのヤスユキは「おどおど」していたが、かれらと色々話したり一緒に遊んだりするうちに「社交的な性格」になり、「いっぱい喋って笑いをとる」ようになったという。

中学校には、同じ小学校にいた友達もおり、かれらを介してヤスユキがハーフだと知っている同級生もいた。中学入学直後は、ハーフだということでからかわれることもあったが、小学校の頃に比べればその頻度は随分減ったそうだ。そして、からかわれる頻度が減ると同時に、ヤスユキが持っていた「半分半分やったら、どっちでもやられる」という認識も少なくなっていったという。

高校に入ってからは、ハーフという理由でからかわれることがほとんどなくなったので、ヤスユキは気楽に過ごしていた。クラスにはヤスユキの他にも「フィリピンとのハーフ」であるエリという同級生がいた。クラスメートたちは、クラスにフィリピンとのハーフがふたりいることを知っていたが、そのことをとりたてて意識することもなかったという。

ヤスユキ：「いるぞー、っていう感じじゃなくて、いるでー、みたいな。なんていうん。なんか、えーと、たとえば、長野出身やでーぐらい。長野出身の人いんねんでー、みたいな。長野出身やと結構驚くな、高校やと〈笑い〉。」

筆者：「うん、そうやな〈笑い〉。逆にな〈笑い〉。」

ヤスユキ：「だから、もっと近場で言うとこう、あれやな、心斎橋のほうから引っ越して来た人いんねんてーぐらい〈笑い〉。」

また、ヤスユキが通っていたのは、「笑いにストイック」な高校だった。

そのため、TPOを誤ると笑えないような「ギリギリのギャグ」を言うことが多かった。ヤスユキがハーフであることもギャグの「ネタ」になることがあったが、ヤスユキにはそれがとてもおもしろかったという。

ヤスユキ：「それほんまに笑っていいん［ああ］、っていうギリギリのところ、をついてくる［ああ］。な－相手間違えるとやばい［ああ］というか、相手間違えるとやばいしシチュエーション間違えるとやばいし［うんうん］。TPOどの面も、なんか、笑うか笑わん－笑うか真顔になるか、ギリギリのギャグというか〈笑い〉。」

また、高校でヤスユキは友達の影響で軽音部に入り、ドラムを始めた。水泳部にも入り、中学の友達ともバンドを組んでいた。そのため、ヤスユキは水泳部、軽音楽部、バンドを同時に掛け持ちすることになり、成績がみるみるうちに落ちていった。その結果、大学受験に失敗し、浪人することになった。

1年の浪人を経て、ヤスユキは大学に入学した。大学では、自分が「フィリピンとのハーフ」だということを、高校の頃のように「ギリギリのギャグ」で話すこともあれば、何かの拍子に話すこともあるという。

ヤスユキ：「たとえば、そうやな、大学やと、講義でキリスト教関連の講義があったりして［うん］、で、なんか詳しいなって言われて、うち親がキリスト教の国の人やから、みたいな感じ。うちフィリピンの人でキリスト教やから、なんかぼくもなんかちょっとかじってんねん、みたいな感じで言ったりとか。そんな感じかな。」

ヤスユキにとって、フィリピンとのハーフであることは、「静岡出身」であるというようなことと大差ないという。「静岡県みたいな感じで（中略）フィリピン県という県があって、お母さんはそこ出身で、みたいな感じ」だそうだ。そして、ヤスユキにとって、それは自分をつくる「ひとつの構成要素にすぎない」。

ヤスユキ：「たしかに土壌としてはあるけど、それは、ひとつの要素であって［うん］、なんか、もっと生きて来たプロセス全部でひとつの人間が構成されるわけやから［うん］、そういうことじゃね？って感じ？」

ヤスユキが大学1年生の時に祖母が危篤になり、家族で二週間ほどフィリピンを訪れる機会があった。その時には、現地の人たちとも英語で「コミュニケーションがとれる」ようになっていたので、ヤスユキは「楽しい」と思えたという。しかし、虫が苦手だということもあり、フィリピンに行くこと自体にはやはり抵抗があるそうだ。

高校では頻繁に教会に行っていたヤスユキだったが、大学に入ってからは忙しくなり、「思い出したら行くぐらい」の頻度になったそうだ。教会で「外人と喋れる機会はめちゃめちゃ多かった」ため、ヤスユキは、英語を話せるようになるためだけであれば、「英会話教室も必要ないし、留学する必要もない」と考えている。

ヤスユキは、母親とのコミュニケーションにおいて、英語は聞くだけで、返事は日本語でしたいそうだ。ヤスユキが母親に日本語で話しても「概念」が通じなかった時には、英語で「頑張って説明」しようとしたり、いつも母と英語で会話している父に助けを求めたりするという。そんなヤスユキとは異なり、ヤスユキの姉は日本語よりも英語で話すことが多いという。そして、ヤスユキの家では、2、3年に1、2回程度、ヤスユキの姉が「全部英語だけで喋ろうゲーム」を始めることがあるという。

ヤスユキ：「（お姉ちゃんが）英語だけで喋ろ、って（お父さんが）、OK、って言って、お母さんはそれふつうやから、それで、うんいいわよ、ぐらいのスタンスやけど［うん］、お父さんもノリノリで参加すんねんけど［うん〈笑い〉］〈笑い〉［うん］で、なんか、お父さんが姉ちゃんに〈笑いながら〉いっぱい喋りかける［うん］。おもしろいなって。え、ぼく日本語で喋りたいねんけど［〈笑い〉］って言ったら（お姉ちゃんかお母さんが）No～って［〈笑い〉］〈笑い〉、みたいな感じでなんか、そういうので英語喋るっていうのは時々ある。」

筆者：「へぇ。」

ヤスユキ：「けど、基本的にほんまに日本語だけやったかな。」

筆者：「そうなん〈笑い〉。今も2年、2、3年に1回ぐらいある？」

ヤスユキ：「あった。こないだあった。」

筆者：「こないだ〈笑い〉。」

ヤスユキ：「〈笑い〉LINEの－LINE全部英語になっててほんま笑った。」

また、アルバイト先での経験から、英語が話せたほうが便利だと思うことも多くなり、英語は「コミュニケーションツールのひとつとして頑張って習得すべきもの」だと思うようになったという。

ヤスユキ：「とにかく自分で喋らんことにはどうしようもないな、っていうのを、バイトで外人とめっちゃ会って［うん］、日本語が通じひん、っていう局面によく直面することによって気づくよな［うん］。なんか、もういちいちジェスチャーとかするのめんどくさくなってきて〈笑い〉、英語喋れるほうが便利やなって思って、最近はちょっとがんばって英語でやってみようかな（話してみようかな）、っていうのをやって。で、（英語で話し）終わったときにドヤッみたいな感じで〈笑い〉。」

一方、タガログ語は「全体の0.03％ぐらい」の語彙しか理解できないが、「習得しときゃよかったかなあ」と思うだけで、「がんばって勉強しよう」という気にはならないという。フィリピンの人たちは話せるようになるための英語教育を義務教育で受けているので、フィリピンの人たちとも英語でコミュニケーションをとればいいと思っているそうだ。

5. 考察

まず、「移動する子ども」という分析概念に付随する「言語間を移動する経験」に注目しながら、サチコとヤスユキの言語との関わりについて考察を行う。

幼少期から母との会話が「日本語ばかり」だったサチコは、TZを訪れるうちに、祖母と話す時のための言葉が存在することに気が付いた。そして、母に教えられるまで「中国人はみんなTZ語を喋ってる」と考えていたという。

このときのサチコは、母やまわりの人たちと話す言葉（＝日本語）と、母の故郷で祖母と話す時に使う言葉（＝TZ語）が存在すると認識していたのではないかと考えられる。一方、母が話す言葉が「英語と日本語とタガログ語のちゃんぽん」だったというヤスユキは、当時はそれらがすべて「同じ言葉」であると「勘違い」しており、複数の言語としては認識していなかったと語る。そして、幼稚園の友達との会話の中で「通じない言葉」があることに気付いたことがきっかけで、母が話す言葉が複数言語の「ちゃんぽん」であることを知る。ヤスユキにとって日本語は「日本語」という名前を持つ言語である前に、幼稚園の友達に「通じる言葉」として認識されていたといえるだろう。

このとき、サチコにとって、TZ語は「祖母と話す言葉」として認識されていたように、ヤスユキにとって、タガログ語や英語は幼稚園の友達と話す時には「通じない言葉」として認識されていた。ふたりにとっては、どちらも特定の国名を冠した言語としてではなく、その言語を使う相手や場面と関連づけられて表現されている。ふたりの語りから、かれらは自身の言語を、国家など固定的な枠組みで区切られた○○語としてではなく、既存の枠組みでは複数に分けられうる曖昧な言語のかたまりのようなものと捉えていたのではないかということが伺える。そして、その曖昧なかたまりは、他者とのコミュニケーションの経験に基づき、他者との関わり方や他者と関わる場面を反映したかたちで認識されていたといえる。

また、サチコとヤスユキの語りからは、かれらが相手によって絶えず自身の位置づけを変化させていることが読み取れる。たとえば、サチコの自身の外見に対する語りは、「日本人と変わらない」、「外人っぽい」と、一見すると一貫性がないように思える。しかし、彼女はそれぞれの語りにおいて、異なる参照先を設定しているのである。そして、参照先が変化すると同時に、サチコが構築するアイデンティティも変化しているといえよう。

6. おわりに

本稿では、複数言語環境に育った青年たちの経験をライフストーリーというかたちで記述した。そして、「移動する子ども」という分析概念を用いて考察を行うことで、既存の言語カテゴリーありきではない視点で、かれらがどのように周囲の言語や人々と向き合い、関わってきたのかということを明らかにした。

グローバル化による人々の大規模な移動に伴い、日本において、国家、民族、血統、エスニシティといった枠組みからは捉えきれない人々はさらに増えていくことが予想される（青木2016）。複数言語環境に育つ人々もすでに珍しい存在ではないが、かれらを包括的に捉えることができる分析枠組みについては、今後も検討を重ねていく必要があるだろう。

［注］

1） 本稿では、「彼／彼女」という表現の代わりにひらがなの「かれら」を用いる。
2） 文部科学省公式ホームページによると、「日本語指導が必要な児童生徒」とは、「1. 日本語で日常会話が十分にできない者及び2. 日常会話はできても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている者で、日本語指導が必要な者」を指す。
3） 「発達段階のかなりの期間を、両親の文化圏の外で過ごした子どもたち」（Pollock & Van Reken 2009：13）を指す。
4） 「言語教育カテゴリーとは、母語教育、外国語教育、継承語教育等、子どもの言語教育や言語学習を表すために大人が作った既成のカテゴリー」（川上2011：6）を指す。
5） 協力者のプライバシーは守られること、録音はいつでも中断できること、インタビューで答えた内容で取り消したいものがあれば後から削除できること、インタビューでのやり取りは論文のデータとなることを伝えた。
6） それぞれの記号の意味は次の通りである。1.「－」音が途切れていることを示す。2.「…」沈黙。3.「〈　〉」笑い。4.「［　］」相手の発話に重なる短いあいづち。

5.「(　)」筆者による補足コメント。また、鍵括弧でくくられている部分は、協力者たちの言葉をそのまま引用した部分である。

7）サチコの母親の故郷。

8）TZで話される方言のこと。北京語と発音や文法体系が大きく異なる。

9）直後でも述べているように、小学生のサチコにとって「中国語」と「TZ語」は同義であった。

10）教会で開かれるミサで行われる聖書の朗読。信者によって行われることが多い。

［参考文献］

青木直子（2016）「21 世紀の言語教育：拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」Journal CAJLE, vol.17, pp.1-22.

榎井縁（2011）「外国にルーツをもつ子どもたちのこれまでと現状」財団法人アジア・太平洋人権情報センター（編）『外国にルーツをもつ子どもたち―思い・制度・展望』現代人文社

川上郁雄（2011）『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版

川上郁雄（2013）「「移動する子ども」学へ向けた視座―移民の子どもはどのように語られてきたか」川上郁雄（編）『「移動する子ども」という記憶と力―ことばとアイデンティティ』くろしお出版，pp.1-42.

斎藤ひろみ（2005）「日本国内の母語・継承語教育の現状と課題：地域及び学校における活動を中心に」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』1：25-43.

桜井厚（2002）『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方』せりか書房

桜井厚・小林多寿子（編）（2005）『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』せりか書房

関口知子（2003）『在日日系ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店

中島和子（2001）『バイリンガル教育の方法―12 歳までに親と教師ができること』アルク

中山亜紀子（2008）「「日本語を話す私」と自分らしさ：韓国人留学生のライフストーリー」大阪大学大学院文学研究科　博士論文

ブルーナー, J.（1998）『可能世界の心理』みすず書房

ホール, S.（2001）「誰がアイデンティティを必要とするのか？」宇波彰訳，ホール, S., ドゥ . ゲイ , P編, 宇波彰監訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題―誰がアイデンティティを必要とするのか』，pp.7-35. (Introduction, Who Needs ‘Identity’ ? In Questions of cultural identity: Who needs ‘identity’?, pp.1-17. By S. Hall

and P. Du Gay Eds., 1996, London: SAGE.)
真嶋潤子（2009）「外国人児童生徒への母語教育支援の重要性について―兵庫県母語教育支援事業に携わって―」『平成 20 年度　新渡日の外国人児童生徒に関わる母語教育支援事業　実践報告書』兵庫県教育委員会（母語教育支援センター校等連絡会），pp.38-43.
松本一子（2005）「日本国内の母語・継承語教育の現状：マイノリティ自身による実践」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』1：96-106.
箕浦康子（2003）『子供の異文化体験―人格形成過程の心理人類学的研究　増補改訂版』新思索社
村岡英裕（2002）「質問調査：インタビューとアンケート」『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』J. V. ネウストプニー・宮崎里司（共編著）くろしお出版，pp.125-142
やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学」やまだようこ編『人生を物語る―生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房，pp.1-38.
Polkinghorne, D. (1995) *Narrative configuration in qualitative analysis.* In Hatch, J. and Wisniewski, R., (Eds). Life history and narrative. 5-24. London: Falmer Press.
Pollock D. C. and Van Reken R. E.（2009）*Third Culture Kids: Growing Up Among Worlds*. Nicholas Brealey Publishing.
Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not*. Clevedon: Multilingual Matters.
文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査－用語の解説」
www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongo/yougo/1266526.htm（2018 年 9 月 3 日最終閲覧）

（大学院博士前期課程修了）

ABSTRACT

Life story of young people who are raised in plurilingual environment living Japan.

Miku NAKAO

This paper has two purposes. One is to present the life story of young people who were raised in a plurilingual environment in Japan. The other is to analyze their experiences related to their languages based on the concept of "Cross Border Children". The reason I adopted this concept is in order to draw them not from any specific category which is tied with their national, ethnic or cultural backgrounds, but from their own perspectives. I collected their narratives through interviewing them and emploted them into a story using narrative analysis, so as to depict their experience from their own point of view.

I have explored life story of Sachiko and Yasuyuki, who are participants of this study, as a collaborator. Through analyzing their narratives and stories, it became clear that they distinguished their languages depending on who they communicate with instead of a static category based on nation. At the same time, their stories showed that they constructed themselves differently depending on the people they were engaging.